

大と小の話 利根川 裕

ニュートヨークのメトロポリタン歌劇場、というの、私はいったことがないから、見当はつくものの、じつは知らない。

その劇場で、ニュートヨーク・フィルの演奏を聴いて帰ってきた友人と会って、さっそく私はその音楽の出来栄をあれこれ訊ねたが、彼はいっこうに乗ってきてくれない。そして、「気取りすぎるね」とか、

「オレは愉快ではないね」

と口走る。彼のイライラしているのは、新任指揮者ズピン・メータ指揮の音楽のことかと思つたら、さにあらず。案内してくれた男（この男が私たちの共通の友人なのだが）への不満らしい。

「あんなにキザなやつとは思わなかったな」ともいう。

「どうしたんだい？」と私。

「だってね……」と、彼がいうには、在米の友人は、メトロポリタンの大歌劇場をさして、「あのこや」といったというのである。字で書けば、小屋のこやである。

「あいつはオレをおのぼりさん扱いして、わざとさりげなく、『あのこやは』なんていやがったよ。いやみだねえ」

と、怒りはなかなか解けない。まあ、この話、わからないではない。

彼としては（彼はかなり英語学の素養がある）、こやの「小」から、littleとか、smallとか、さらには poor というイメージを連想したらしい。メトロポリタン歌劇場がそれにふさわしくないのは当然だろう。だから彼は、それをあえてこやといった、そのひねりかたにカチンときた、という次第である。

が、これは掃部早々のわが友のほうの負け

である。こころみに「広辞苑」をひいて見給え。そこには「小さくて粗末な家」ともあるが、またこう記してもある「芝居または見世物を興行する建物」と。

在米の友人は、もともと東京育ちで、ふだんから「歌舞伎座というこやはね……」とか、「国際劇場ってこやは……」といういいかたを、よくしていたのを、私は知っている。そして、こういういいかたは、れっきとした伝統的な日本語の使いかたである。しかし、英語君は、なまじ英語的理解に長けているばかりに、こういう日本語の使いかたを、もろどこかでふり落してしまったらしい。

先日、急いで校正しなければならぬ原稿があつて、編集者から電話で私の文章を読みあげてもらつたら、そこで「ダイブタイ」と

いう。一瞬、私はとまどった。そんなことは書いた覚えがない。きき直すと、それが「大舞台」のこととわかったが、これは「オオブタイ」と読んでくれなくては困る。

「大歌舞伎」と書けば、「ダイカブキ」ではなく「オオカブキ」にきまりきっている。そこで私は電話口で、それこそ少なからずい、やみに、

「吉原の大門は、ダイモンではなくオオモンでしょう」

というとき、相手は、

「たしか芝の増上寺にあるのはダイモンでしたかね？」

などと逆襲する。それはそうに違いないが、言葉の発生の由来がもともと違うのである。で、私は声をあらげていった。

「幸子と書く女の子がいたら、サチコかユキコかきみは勝手にきめられるのかい」と。

「大相撲は、むろん「オオズモウ」である。

そのことも電話口でいうと、相手は、

「しかしアメリカの野球は、大(ダイ)リーグですね」

などと、まぜ返す。これには私も思わず吹きだしてしまったが、そこで私も負けてなるものかと、

「日本のプロ野球は、王選手がいるかぎりは、オオリグと呼ぶんだ」

というとき、こんどは相手がゲラゲラ笑いだしてしまった。

大相撲も、ついでに「広辞苑」をひくと、①盛大な相撲。②大日本相撲協会によって行われる相撲。③四つに組んで見ごたえのある相撲とある。ふつう私たちがテレビでみる相撲は、

②の大相撲である。つまり、草相撲に対する大相撲である。

話はあるが、国鉄の駅名の標識というのは、なかなか多様化していて、たとえば「金沢」の漢字記名と、「KANAZAWA」のローマ字記名と、「かなざわ」というひらがな表記の三つが同居している。「あれで日本語を覚えるのがコツです」といった外人がいた。そういう功徳もあるが、それとは別に、国鉄当局はどうも漢字にひきずられがちで、「熊谷」を「くまがや」と表記している。本来は、熊谷(クマガイ)次郎直実のように「くまがい」であったはずだ。「谷」という字にひきずられて「がや」になってしまったのだらう。

現代は視聴覚時代だ、などという。たしかに表面は文字離れが進んでいるようにみえるが、しかし、それは本当かしら。むしろ、大

舞台や大歌舞伎をダイブタイ、ダイカブキなどと読むのは、文字面からくる誤法である。文盲のむかしの人は、ちゃんと音として文化を伝承していたから、そんなあやまちは犯さなかった。とするとき現代こそ文字時代だといいたいくらいである。

言葉と文字の関係はなかなか複雑で、とても一筋縄ではいかない。しかしこここそ文化の厚みがあるのだから、これを開明的に一元化したり簡略化したりしようという文化行政に私は大反対である。

ところが、なまかじりの開明派がいて、それが無学と手を結んでダイブタイなどという。(この種の誤法がなんとテレビやラジオ放送に多いことか。)すると、こんどはそれを聞いて聴覚的に日本語を覚える世代が、それをそのまま継承する。

こうして日本語は、だんだん本来の由緒を忘れてゆくようだ。

これだけ大学がふえたんだから、国語力だけは、小学校なみ、なんてことはあるまい、というのが、この「大と小の話」の、悪くはないおちである。